

報 告

中学生の不登校傾向と社会的コンピテンスとの関連

—悩み状況と相談者の有無の視点も踏まえて—

鈴木 美樹江

〔論文要旨〕

本研究は、不登校傾向の種類により社会的コンピテンスとの関連に相違がみられるか検討すること、および悩み事や相談者の有無についても調査した。中学生201名を対象に質問紙調査を行い、統計学的分析を実施した。その結果、社会的コンピテンスは、内在化問題を基底とした不登校傾向とは有意な負の相関関係がみられたが、外在化問題を基底とした不登校傾向とは有意な相関関係はみられなかった。とくに精神・身体症状を伴う不登校傾向生徒は、社会的コンピテンスも低く、悩み事があると感じながらも、相談する人がいない状態である。これらの生徒には、社会的コンピテンスを促進する介入を行うとともに、相談に乗る体制を早急に整えていく必要がある。

Key words : 社会的コンピテンス, 不登校傾向, 中学生, 悩み, 相談

I. はじめに

中学生における不登校生徒の数は、平成24年度で91,446人であり、9万人を超える生徒がなんらかの問題を抱え、学校に登校することの難しさを抱えている¹⁾。

このような不登校の要因の1つとして、社会的コンピテンスの不足が考えられる。社会的コンピテンスとは、青年期の発達において肯定的な結果をもたらすための社会的情緒的な能力と行動である²⁾。具体的には、社会的コンピテンスは2種類の能力として構成されており、①否定的な感情を把握して統制する力、②社会的問題解決能力である。すなわち、社会的コンピテンスは、状況に応じて社会的スキル（社会的技術）を選択し、実際に行われた行動の効果性、および対人状況の統制能力によって評価されるものである^{3,4)}。そのため、社会的コンピテンスは、社会的スキルの上位概念として位置付けられている⁵⁾。

実際に、社会的コンピテンスが不足している生徒は、普通の生徒と比較して、内在化問題（抑うつなど）のリスクが高くなること⁶⁾や、外在化問題（非行など）のリスクが高くなること⁷⁾が指摘されている。とくに社会的コンピテンスと内在化問題の関連については、数多くの指摘がなされている。人気と抑うつとの間の媒介変数として、社会的コンピテンスが関連している⁸⁾ことや、冷遇と内在化問題との間にも社会的コンピテンスが媒介していたとの指摘もある^{9,10)}。また、社会的コンピテンスの低い生徒は、3年後に内在化した問題を持つことも指摘されており¹¹⁾、長期的な観点から見ても社会的コンピテンスの不足が生徒に与える影響は大きい。

一方、外在化問題においては、適切な社会的スキルが欠如している青年は級友を拒絶する傾向にあり、他者の心理的問題を引き起こす要因となるとの指摘¹²⁾や、社会的コンピテンスが行動的な問題と関連してい

Absenteeism from School and Social Competence in Junior High School Students :

The Influence of Children's Worries and Social Support

Mikie SUZUKI

金城学院大学心理臨床相談室（研究職 / 臨床心理士）

別刷請求先：鈴木美樹江 金城学院大学心理臨床相談室 〒463-8521 愛知県名古屋市中区大森2-1723

Tel/Fax : 052-798-5517

[2634]

受付 14. 5. 7

採用 15. 1. 13

ることも指摘されている¹³⁾。その一方で、社会的コンピテンスと外在化問題との関連は長期的な観点からはみられなかったとの指摘⁶⁾もあり、社会的コンピテンスと外在化問題については一貫した結果が得られていない現状にある。

なお日本においては、社会的コンピテンスと内在化問題や外在化問題について調査した研究は少なく、社会的スキルと不登校傾向に焦点を当てた研究が多くみられる。社会的スキルと不登校との関連について調査した研究では、不登校生徒は登校生徒に比べて、自分から積極的に友人関係を築く力や自己主張力の得点が低いことが指摘されている^{14,15)}。また、不登校傾向とコミュニケーション力との間に負の相関があることについても指摘されている¹⁶⁾。このように社会的スキルやコミュニケーション力と不登校傾向は関連していることが示唆されている。その一方で、非行少年は親しい友人に対しては親和動機が高いために社会的スキルを高く示すが、同級生に対しては親和動機が低いために、社会的スキルを低く示すことが示唆されている¹⁷⁾。このように非行少年は社会的スキルを示す対象によって、社会的スキルの高さが異なっている。

以上より、内在化問題を基底とした不登校傾向（精神・身体症状を伴う不登校傾向等）と、外在化問題を基底とした不登校傾向（遊び・非行に関連する不登校傾向）とでは、社会的スキルの関連が異なることが示唆されている。そのため、上位概念である社会的コンピテンスにおいても、内在化問題を基底とした不登校傾向と外在化問題を基底とした不登校傾向では関連が異なる可能性が考えられるが、両側面の観点から調査した研究はみられない。そこで本研究では、不登校傾向の種類により社会的コンピテンスとの関連に相違がみられるかについて検討を行う。また、不登校傾向と悩み事の有無、相談できる人の有無について調査することで、不登校傾向のタイプごとの悩みに関する状況を把握することを目的とする。

II. 方 法

1. 調査対象・調査期間

愛知県内の公立中学校の1～3年生201名（男子103名、女子98名）を対象に自己記入式質問紙調査をX年4月に実施した。

表1 社会的コンピテンス尺度内容

1. 友だちはたくさんいますか
2. クラスの中では、人気者だと思いますか
3. 友だちに、よくいじわるをされますか
4. 自分が学校を休んでも、皆はあまり心配してくれないと思いますか
5. 新しい友だちを作るのはかんたんですか
6. 友だちは、よく遊びにさそってくれますか
7. クラスの中で、自分は、いなくてはならない人だと思いますか
8. 友だちには、好かれていていると思いますか
9. クラスの人は、あまり自分を相手にしてくれないですか
10. もし転校することになったら、クラスの人にはかなしでくれると思いますか

2. 調査内容

質問紙の内容は、基本情報（学年、性別等）、不登校傾向尺度¹⁸⁾、社会的コンピテンス尺度¹⁹⁾、悩み事の有無、相談できる人の有無について尋ねた質問項目で構成した。不登校傾向尺度は、「別室登校を希望する不登校傾向」3項目、「遊び・非行に関連する不登校傾向」4項目、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」4項目の3因子、計11項目を用いた。“あてはまらない(1)”～“あてはまる(4)”の4件法で回答を求めた。社会的コンピテンス尺度では、Harter¹⁹⁾が作成した Perceived competence scale for children の日本語版児童用コンピテンス尺度²⁰⁾の中の「社会的コンピテンス」因子、10項目を用いた（表1）。“いいえ(1)”～“はい(4)”の4件法で回答を求めた。また、悩み事の有無については、「現在悩んでいることはありますか？」との質問項目に対して、「ありーなし」の2件法で回答を求めた。相談できる人の有無については、「相談できる人はいますか？」との質問項目に対して、「いるーいない」の2件法で回答を求めた。

3. 分析方法

先行研究を参考にして、各尺度の Cronbach α 係数より信頼性を確認したうえで、尺度項目の平均値を因子得点として算出した。不登校傾向と社会的コンピテンスとの関連性については、Pearson の相関分析より検討した。さらに、悩み事のあり群となし群、および相談する人のあり群となし群との間に、不登校傾向得点や社会的コンピテンス得点において有意な差異がみられるかを検討するために、 t 検定を実施した。これらのデータ分析には IBM SPSS ver.19を使用した。

表2 不登校傾向と社会的コンピテンスの基礎統計量と信頼性, 相関係数

尺度名	平均値	標準偏差	α 係数	2	3	4
1 別室登校を希望する不登校傾向	1.45	0.70	.89	.413***	.642***	-.363***
2 遊び・非行に関連する不登校傾向	2.12	0.78	.76		.370***	-.078
3 精神・身体症状を伴う不登校傾向	1.70	0.71	.76			-.418***
4 社会的コンピテンス	2.74	0.51	.79			

*** $p < .001$

表3 悩み事のあり群・なし群と不登校傾向・社会的コンピテンスの平均値および t 検定の結果

尺度名	悩みあり群 (65名)	悩みなし群 (135名)	t 値
別室登校を希望する不登校傾向	1.72 (0.91)	1.32 (0.54)	3.25**
遊び・非行に関連する不登校傾向	2.18 (0.81)	2.10 (0.76)	0.70
精神・身体症状を伴う不登校傾向	2.07 (0.78)	1.53 (0.61)	4.83***
社会的コンピテンス	2.55 (0.56)	2.83 (0.47)	-3.81***

() 内は標準偏差 ** $p < .01$, *** $p < .001$

表4 相談する人のあり群・なし群と不登校傾向・社会的コンピテンスの平均値および t 検定の結果

尺度名	相談する人あり群 (160名)	相談する人なし群 (41名)	t 値
別室登校を希望する不登校傾向	1.41 (0.66)	1.63 (0.82)	-1.88+
遊び・非行に関連する不登校傾向	2.07 (0.74)	2.32 (0.89)	-1.62
精神・身体症状を伴う不登校傾向	1.64 (0.70)	1.97 (0.72)	-2.72**
社会的コンピテンス	2.80 (0.48)	2.50 (0.87)	3.47**

() 内は標準偏差 + $p < .10$, ** $p < .01$

4. 倫理的配慮事項

実施校の教師に調査の趣旨・内容を書面と口頭で説明を行い、校長および担当教師の協議を得て同意が得られた。また、生徒に対して、自由意思による協力であることや、学業成績等とは関係はなく、回答者に不利益を生じること是一切ないことを説明した。また、データ入力後には、原本はシュレッターによって廃棄を行うこととした。

Ⅲ. 結 果

不登校傾向尺度と社会的コンピテンス尺度の平均値、標準偏差、信頼係数 (Cronbach の α 係数) および相関係数を表2に示す。なお、因子得点は、各尺度項目の平均値を使用している。別室登校を希望する不登校傾向や精神・身体症状を伴う不登校傾向は社会的コンピテンスと有意な負の相関関係がみられた。一方、遊び・非行に関連する不登校傾向のみ社会的コンピテンスとの間に有意な相関関係はみられなかった。

次に、悩みあり群と悩みなし群の間に、不登校傾向

下位尺度得点および社会的コンピテンス得点において差がみられるかを検討した。その結果、別室登校を希望する不登校傾向 ($t(86) = 3.25, p < .01$) と精神・身体症状を伴う不登校傾向 ($t(103) = 4.83, p < .001$) については、悩みあり群の方がなし群より有意に得点が高かった(表3)。一方、社会的コンピテンス ($t(198) = -3.81, p < .001$) については、悩みなし群の方があり群より有意に得点が高かった。なお、遊び・非行に関連する不登校傾向については、有意な差がみられなかった。

続いて、相談する人があり群となし群の間においても、同様に不登校傾向下位尺度得点および社会的コンピテンス得点において、差がみられるかを検討した。その結果、精神・身体症状を伴う不登校傾向 ($t(199) = -2.72, p < .01$) については、相談する人のなし群の方があり群より有意に得点が高く、別室登校を希望する不登校傾向 ($t(199) = -1.88, p < .10$) については、相談する人なし群の方があり群より得点が高い有意傾向がみられた(表4)。一方、社会的コン

ピテンス ($t(199) = 3.47, p < .01$) については、相談する人あり群の方がなし群より有意に得点が高かった。なお、遊び・非行に関連する不登校傾向については、悩み事あり群となし群、および相談する人あり群となし群とに有意な差がみられなかった。

IV. 考 察

社会的コンピテンスは、別室登校を希望する不登校傾向と精神・身体症状を伴う不登校傾向との間に相関がみられた。なお社会的コンピテンスの低い生徒や社会的に孤立している生徒においては、内在化した問題を持つことが示唆されていた¹¹⁾。本研究においては、社会的コンピテンスが内在化問題の中でも別室登校や精神・身体症状といった不登校傾向との観点から支持する結果となった。

また、本研究では悩み事あり群はなし群より、社会的コンピテンスが低く、別室登校を希望する不登校傾向や、精神・身体症状を伴う不登校傾向が高いことが示唆された。本研究の中で具体的な悩み事の種類については尋ねていないが、社会的コンピテンスの低さが悩み事の有無に関連している可能性が推察できる。実際に、社会的コンピテンスが不足している生徒は、クラスメートの冷遇につながり、内在化問題へと発展することが指摘されている^{9,10)}。すなわち、社会的コンピテンスが低いことで、クラス内での人間関係の悩みを抱えることにつながり、結果的に精神・身体症状につながっている可能性が考えられる。また、社会的コンピテンスが不足していることで、クラス内での居場所がなく、別室登校を望んでいる可能性も考えられるのではないだろうか。悩み事を抱えている生徒においては、社会的スキルや問題解決能力向上をはじめとした援助も視野に入れて、支援していく必要があると考えられる。

また、このような悩みを抱えている生徒においても相談できる人がいることで、不適応問題までに至らないとされている²¹⁾。しかし、本研究結果では、相談する人のなし群の方が、相談する人のあり群より、社会的コンピテンス得点が低く、精神・身体症状を伴う不登校傾向が高い傾向がみられた。このことから、社会的コンピテンスが低く対人関係上で問題を持ちやすい生徒においては、悩み事を抱えているとしても相談する人がおらず、精神・身体症状を主訴とした不登校傾向がみられる可能性が示唆された。すなわち、精神・

身体症状を出している生徒においては、悩み事を相談できずにいる状態であり、誰かに相談に乗ってほしいという気持ちが背景にあることが考えられる。山崎²²⁾は、不登校傾向生徒は、助けてほしいときに助けてと言わずに体調不良で出てくる場合について指摘している。また、とくに生徒が頭痛・腹痛などを訴え、しかも不調を訴える部位が変化する場合は、心理的な問題を抱えていることが示唆されている²³⁾。そのため、精神面での訴えのみではなく身体面での訴えにおいても、その背景の悩みを意識しながら話を聴いていくことで、生徒との信頼関係を構築していく必要がある。

なお、遊び・非行に関連する不登校傾向では、社会的コンピテンスとは相関がみられなかった。これは、非行少年が相手により社会的スキルを使い分けるとの指摘¹⁷⁾を支持する結果であったと推察される。すなわち、遊び・非行傾向の生徒は、グループ内で人間関係を構築するための努力はするなどの関係が築ける一方で、親しくない友人においてはそのような努力をしないため、社会的コンピテンスとの関係が相殺され、有意差がみられなかったと考えられる。一方、遊び・非行に関連する不登校傾向は、悩み事あり群となし群との間、および相談する人のあり群となし群との間においても有意な差がみられなかった。これは、非行生徒が悩みを抱えられない特徴を有している²⁴⁾ことや、問題焦点型ストレスコーピングと負の関連がある点²⁵⁾が関係している可能性がある。すなわち、遊び・非行生徒においては、心理的な問題を持っていたとしても悩みと認識することや、向き合うことが難しいため、行動化する特徴を持つ。そのため、外在化問題を持つ生徒においては、とすると自分は悩み事がなく、相談する人も必要ないと考えている可能性も推察できる。しかし、外在化問題の生徒においては、大人との信頼関係を持つことや相談できることで、問題行動が減少することが指摘されている²⁶⁾。そのためには、自分の心の内に起きている不安や不愉快な体験を振り返るような落ち着いた時間と場所が必要であり、その中で共に悲しみ、落ち込みから立ち上がっていく生徒を理解し、支えていく支援²⁴⁾が必要である。

V. 結 論

本研究を通して、内在化問題を基底とした不登校傾向生徒と外在化問題を基底とした不登校傾向生徒で

は、社会的コンピテンス、悩み事の有無、相談する人の有無について異なる結果が得られた。内在化問題を基底とした不登校傾向（精神・身体症状を伴う不登校傾向）では、社会的コンピテンスも低く、悩み事があると感じながらも、相談する人がいない状態であることが示唆された。これらの生徒には、社会的コンピテンスを促進する介入を行うこと、および相談に乗る体制を整えていく必要があると推察された。

一方、外在化問題を基底とした不登校傾向（遊び・非行に関連する不登校傾向）では、社会的コンピテンス、悩み事の有無、相談する人の有無について、有意な結果が得られなかった。このことは、ともすれば非行傾向の生徒には悩み事がないように捉えがちであるが、この点こそが彼らの配慮しなければならない点であろう。非行傾向の生徒は、悩みとして抱えられない点、および困ったことがたとえあったとしても、大人に自分からSOSを出すことが難しい特徴を有することの表れとも捉えられる。今後、非行傾向の生徒には、大人を信頼したいけどできない気持ちを汲みとりながら、向き合い、サポートしていく必要がある。

今後の課題としては、1つの学校で実施したものであるため、今後さらに都市部と他の地区等複数の地区で調査をしていく必要がある。本研究では社会的コンピテンスが社会的サポートや不登校傾向に因果関係を与えるかについては調査していないため、今後因果関係についても調査していく必要がある。また、事例を通した検討を行うことで、社会的コンピテンス、悩み事の有無、社会的サポートが不登校傾向に与える影響過程について検討する必要がある。

謝 辞

本調査にご協力いただきました生徒の皆様、教諭の皆様には心深く感謝申し上げます。また、常日頃より貴重なご助言の数々を頂いております金城学院大学人間科学部 加藤大樹先生にもこの場を借りて心より深謝申し上げます。

本研究は、科学研究費補助金（若手研究（B）26780404）の助成を受け実施した研究の一部です。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 文部科学省. 平成24年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果について. 平成25年12月10日. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afield-file/2013/12/17/1341728_02_1.pdf
- 2) Bierman KL, Welsh JA. Assessing social dysfunction: The contributions of laboratory and performance-based measures. *Journal of Clinical Child Psychology* 2000; 29: 526-539.
- 3) Duck S. Socially competent communication and relationship development. Schneider BH, Attili G, Nadel J, et al, Eds. *Social competence in developmental perspective*. Dordrecht, Netherlands: Kluwer, 1989: 91-106.
- 4) Gresham FM. Conceptual issues in the assessment of social competence in children. Strain PS, Guralnick MJ, Walker HM, Eds. *Children's social behavior: Development, assessment, and modification*. New York: Academic Press 1986: 143-179.
- 5) 柴田利男. 幼児における社会的コンピテンスの諸測定度間の相互関連性とその個人差. *発達心理学研究* 1993; 4 (1): 60-68.
- 6) Burt KB, Obradovic J, Long JD, et al. The interplay of social competence and psychopathology over 20 years: Testing transactional and cascade models. *Child development* 2008; 2: 359-374.
- 7) Wang MT. School Climate Support for Behavioral and Psychological Adjustment: Testing the Mediating Effect of Social Competence. *School Psychology Quarterly* 2009; 24: 240-251.
- 8) Nangle DW, Erdley CA, Newman JE, et al. Popularity, Friendship, Quantity, and Friendship Quality: Interactive influences on children's loneliness and depression. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology* 2003; 32 (4): 546-555.
- 9) Kim J, Cicchetti D. A longitudinal study of child maltreatment, mother-child relationship quality and maladjustment: The role of self-esteem and social competence. *Journal of Abnormal Child Psychology* 2004; 32: 341-354.
- 10) Shonk SM, Cicchetti D. Maltreatment, competency deficits, and risk for academic and behavioral maladjustment. *Developmental Psychology* 2001; 37: 3-17.
- 11) Hymel S, Rubin KH, Rowden L, et al. Children's

- peer relationships : Longitudinal peer relationships : Longitudinal prediction of internalizing and externalizing problems from middle to late childhood. *Child Development* 1990 ; 61 : 2004-2021.
- 12) Eisenberg N, Fabes RA. Emotion, regulation, and the development of social competence. Review of personality and social psychology 1992 ; 14 : 119-150.
 - 13) Hoglund WL, Leadbeater BJ. The Effects of Family, School, and Classroom Ecologies on Changes in Children's Social Competence and Emotional and Behavioral Problems in First Grade. *Developmental Psychology* 2004 ; 40 (4) : 533-544.
 - 14) 曾山和彦, 本間恵美子, 谷口 清. 不登校中学生のセルフエスティーム, 社会的スキルがストレス反応に及ぼす影響. *特殊教育学研究* 2004 ; 42 (1) : 23-33.
 - 15) 朝重香織, 小椋たみ子. 不登校生の心理について—普通学校中学生との比較から—, 神戸大学発達科学部研究紀要 2001 ; 8 : 1-12.
 - 16) 五十嵐哲也. 中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連. *教育心理学研究* 2011 ; 59 : 64-76.
 - 17) 磯部美良, 堀江健太, 前田健一. 非行少年と一般少年における社会的スキルと親和動機の関係. *カウンセリング研究* 2004 ; 37 (1) : 15-22.
 - 18) 五十嵐哲也, 萩原久子. 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連. *教育心理学研究* 2004 ; 52 : 264-276.
 - 19) Harter S. The perceived competence scale for children. *Child Development* 1982 ; 53 : 87-97.
 - 20) 桜井茂男. 小学校高学年生における自己意識の検討. *実験社会心理学研究* 1992 ; 32 : 85-94.
 - 21) Hagen KA, Myers BJ, Mackintosh VH. Hope, social support, and behavioral problem in at-risk children. *American Journal of Orthopsychiatry* 2005 ; 75 (2) : 211-219.
 - 22) 山崎 透. 不登校に伴う身体化症状の遷延要因について. *児童青年精神医学とその近接領域* 1998 ; 39 : 420-432.
 - 23) 森岡由紀子. 児童・生徒の心のサインをキャッチする—子供はなぜ自ら訴えないのか—. *教育と医学* 1996 ; 44 : 321-326.
 - 24) 生島 浩. 悩みを抱えられない少年たち. 東京 : 日本評論社, 1999.
 - 25) Eggum N, Julie S, Eisenberg N. "The it will be good" : Negative life events and resilience in ugandan youth. *Journal of Adolescent Research* 2011 ; 26 (6) : 766-796.
 - 26) Lifrak PD, Mckay JR, Rostain A, et al. Relationship of perceived competencies, perceived social support, and gender to substance use in young adolescents. *Journal of the American Academy of Child Adolescent Psychiatry* 1997 ; 36 : 933-940.

[Summary]

The present study aimed to examine the relationship between different types of non-attendance from school and social competence, and to investigate the influence of children's worries and social support on this relationship. Participants were 201 students (103males, 98womens) aged 12-15years (the 1st, 2nd, 3rd grades) who were enrolled in a junior high school in Japan. The relationship of each factor was assessed using the self-reported questionnaire. Statistical analysis of students' responses on the questionnaire indicated that non-attendance was significantly negatively correlated with internalizing problems and social competence. Furthermore, students who tended to internalize problems demonstrated lower levels of social competence, lacked social support, and worried more than their peers who did not. These results suggest the need for interventions to improve their social competence, and establish a system that would enable children to consult for support and guidance on.

[Key words]

social competence,
tendency toward non-attendance at school,
junior high school, worries, social support